2023年10月26日 中日新聞 朝刊 12頁

ドラマ館跡地の展示収蔵施設

市、来春までに基本計画

浜松市が中区の大河ドラマ館の跡地で計画している徳川家ゆかりの品々の展示収蔵施設について協議する検討委員会の第1回会合が25日、市役所であった。市側が日本設計を代表とする共同企業体（JV）の企画書を提示し、来年3月までに基本計画を作成すると説明した。有識者の委員からは収蔵品の中身に注文する意見などが出た。

城郭研究の第一人者で、名古屋市立大高等教育院の千田嘉博教授が委員長。静岡文化芸術大文化政策学部の水谷悟教授、浜松商工会議所の斉藤薫会頭、市自治会連合会の広野篤男会長、浜松まちなかにぎわい協議会の稲本幸恵事務局長が委員を務める。

企画書では、施設のテーマを「お城を望む市民の家」と掲げ、主な入り口となる「新葵門」やひさしの空間を整備する。大河ドラマ館については「既存施設をそのまま使用」「部材や機器類を使用」など複数の案を示している。

基本計画を巡っては、関連経費を盛り込んだ予算案が市議会で可決されたが、一部の市議が反対した経緯がある。検討委では「議会に対してクリアできているのか。（検討を）やっても意味がないということになるのが心配」との声が上がり、市側は「基本計画を進めることにご理解はいただいている」と説明した。

展示収蔵施設について意見を交わす検討委員会のメンバーたち＝浜松市役所で

徳川記念財団（東京）の所蔵品のうち、どのような品が展示されるかはこれから決まる。委員からは「浜松市の歴史と文化に関わることが大切」「どんな史料がどれくらい浜松にくるのか定まらないと受け皿が定まらない」といった意見も出た。（木造康博）

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています